「思い出の少年二人」

小川省二（昭60）

昭和二十三年、当時、私は横須賀高校の野球部の監督をしていました。その頃、県商工に練習試合でこちらにきてもらったことがあります。

その商工チームで一際、がっしりとした体格の選手に私が「君、名前は」と聞くと姿勢を正して大沢と言いますと答えました。と、商工の監督が、柄は大きいんですがあいつは、まだ中学三年（旧制）なので今年の大会（全国高等学校野球選手権大会）には出られないんですと笑いながら話してくれました。

試合になって、彼の打球は二打席ともグランドの柵を超えて隣接する住宅の屋根に落ちてゆきました。三打席目に彼は私の所にきて、次ぎは左で打ってもいいですかと言う「いいよ」と言うとピョコンと頭下げ左打席に入り、一振りすると打球は今度も柵を超え遥か彼方に消えていったのです。

練習試合が終り、差し入れのふかし芋が出ると「こいつはうめえー、ありがとうございまーす」と両手に芋を持って誰か大声で叫んでいる。大沢君でした。昭和二十五年、投手で四番打者の大沢君が高二の夏、県商工は念願の甲子園出場を果たしました。

大沢啓二。高校、大学、プロ選手、監督と波乱に富んだ彼の野球人生の中でつぎつぎと起こす破天荒な行動、言動を耳にする度に私は、両手に芋を持って踊っているヤンチャなあの時の顔を思い浮かべるのでした。

暮れなずむ校庭を泥のついたユニホームのまま、悠然たるガニ股歩きで校門まで行き、くるりと振り返って深々と一礼して去って行った大沢少年の後ろ姿を今でもはっきりと覚えています。

昭和二十五年、私は野球部からすでにバスケットボール部顧問に変わっていました。

四月、体育館に集まった新入部員の前でコーチが、今日から一週間、君らの体力、気力の程度を知るために、いろいろなトレーニングをするからと申し渡しをしていました。

当時の男子高校生の頭は殆どが丸刈り、イガ栗頭でした。この新入部員の中で唯一人だけ身長は中ぐらい、やや小太りの長髪の生徒がいました。さまざまなフットワーク、指立て、腹筋運動、短距離走、中距離走、長距離走、どのステージでも長髪君はイガ栗頭達の後塵を拝してビリ穴でした。負けん気で歯を食いしばり、時には泣きそうな顔で頑張っているのですがどうしても一つも二つも遅れをとっていました。

でも、授業が終わって、体育館へ一番先に現れるのはきまって長髪君でした。そして、ちょっとでも時間があればコートを黙々と走るのです。一日の練習が終わり、コートの床拭きが済んで体育館を最後に出るのも長髪君でした。

入部から一週間が経って、そのミーテングで長髪君が突然、立ち上がると「僕は、慶応大学普通部（現慶応高校）を受験していました。先日、合格発表があり合格しました。明日が入学式なんです。ですから今日で皆さんとお別れです。滑り止めでここにきていました済みません。でも、この一週間、皆さんの僕への励ましは決して忘れません。ありがとうございました」と一礼し、私とコーチのところにきて姿勢を正すと「お世話になりました」と丁寧に頭を下げました。実に礼儀正しい、爽やかな態度でした。私が「あっちでもしっかりな」と言うと「はい」、ニッコリと微笑んだ笑顔を今でも鮮明に思い出します。

さて、この長髪君があの石原裕次郎、裕次郎少年であったことを私が知ったのはそれから長い年月が経ってからのことでした。

平成二十五年 神奈川県立商業高等学校 通信教育会 "有朋" 掲載

## ある出会い

昭和三十二年秋、当時鎌倉に住んでいた私達夫婦が連れ立って、由比ガ浜通りを歩いていた時のことである。ゆるゆるとこちらに歩いてくる小柄な和服姿の老人と擦れ違った。擦れ違いざま立ち止まり気味に身体をねじると、そのギョロリとした眼で隣にいる女房の全身を足の先まで舐めるように見ながら通り過ぎた。一瞬の間であった。まだ二十二歳の妻は脅えたように私の方に身を寄せて来た、嫌な爺いだと私は思った。と、待てよと、私は振り返ってその老人の後ろ姿を見て、あゝやはり川端康成だと判った。

それから半年位の間、何故か何度も川端康成さんを見掛けたり、出会うことがあった。駅前のデパートの地下食品売り場で一人分位の総菜を覗き込むようにいくつも買っている姿はしょぼくれた老人そのものであった。小町通りの曲がり角で鉢合わせしてぶつかりそうになったときは、顔を見合わせ思わず会釈してしまった。

今はもう無いが、鎌倉裏駅の前に映画館があった。そこに、室生犀星原作、香川京子主演の映画『杏っ子』を観に入った。映画は始まったばかりで場内は暗く、探るようにして席に座った。映画が終わって場内が明るくなり、隣の人と顔を合わせて互いに笑ってしまった。川端康成さんであった。

『よくお会いしますね、成瀬（巳喜男映画監督）は仲々やりますね。いい作品でした。杏っ子は室生さんの一人娘朝子さんで、実物もとても美しい人ですよ。ところで、またどこかで貴方とお会いしますかね』喋るだけ喋ると川端さんは、ではと言って席を立っていった。だがそれから川端さんとお会いすることはなかった。

考えてみるとこの時、この老人は日本ペンクラブの会長であり、やがて文化勲章、ノーベル文学賞受賞の華やかな人生を歩んだ後、昭和四十七年、逗子マリーナで自ら命を断ってしまった。だから、これはその十五年前の出会いということになる。

神奈川県立高等学校退職校長会　平成十二年九月（有朋）　掲載

## 父の〝お話〟

私の父は、醸造業を営んでいて、時間に余裕のあったせいか、私の幼い頃からかなり成人するまで暇さえあれば〝お話〟をしてくれた。自分の子供の頃の話、田舎に伝わる昔話、父の父母のこと、友達のこと、小説、歌、相撲、絵、科学、落語、講談・・・・少し大きくなると政治や経済の表や裏の話にまでなった。その範囲は広く、実に種々雑多であった。風呂に入りながら、縁台で涼んでいるとき、コタツで蜜柑を食べながら、旅行中の汽車の座席で、蚊帳の中でゴロッと横になりながら、・・・・・所かまわず押し付ける風もなく、独り言の様にぼそぼそと話し出す。私はいつの間にか、話に引き込まれているのであった。

そこで、二つほどその〝お話〟をあげてみよう。これは私が小学校低学年の頃聞いたものである。

父の親しかった友人が急に亡くなった。そのお通夜の席で故人の思い出話を皆で順番にしようということになった。父に順番がきて、故人が一寸、恥ずかしいので君だけに話すと言ったのだが、もういいだろうと思って、こんな話をしたそうである。

その人は大変な釣り好きで、漁師でもないのに天気でありさえすれば毎日の様に、東京湾に小舟を出して釣りをしていた。その日も猿島の近くで釣り糸を降ろしていたが、突然、竜巻の様な強風が起きて、あっという間に小舟は転覆してしまった。その人は必死で泳いだのだが、ついに力尽き、意識を失ってしまった、それからどのくらい時間が経ったのだろう、運よく房総（千葉県）の浜に俯せになって、打ち上げられていたのであった。これを土地の漁師が見つけて、その人の肩を激しく揺すった。

「おい、しっかりしろ。オメエ、どこのもんだ」

その人は気が付いたのだが、疲れで口が全くきけない。黙ったまま指で砂に字を「大日本」と書いた。話はこれだけなのだが、小学校四、五年になって、この話を思い出す度にそのおかしさで、授業中など笑いをこらえるのに苦労したのを覚えている。

その人にとって、この漂流時間は、とてつもなく長かったのであろう、だから、ひよっとしたら南洋諸島か、もしかしてハワイにでも来てしまったと、感じたのであろう、そこで「大日本」と書いた。それにしても「オメエ、どこのもんだ」と聞いているのが日本語なのに、やはり、おかしさが込み上げてきて仕方がない。

今度の〝お話〟は中学の一、二年の頃してくれたものである。

あの俳聖、松尾芭蕉が、ある禅寺に泊めてもらった時のことである。月光の明るくさし込む寺の庫裡で和尚と芭蕉が向かい合って座っている。と、芭蕉が、芸術の心、とは何でしょうかと和尚に尋ねた。すると和尚は静かに立ち上って、茶を点て始めた。そして芭蕉に茶碗を差し出しながら、こう言った「花鳥風月この内にあり」

しばらくして、芭蕉は、やおら筆をとると、短冊にさらさらと句をしたためた。

「名月や濃い茶の泡の三世界」

私が高校の教師になりたての頃、芭蕉の句やその生涯に魅せられて、芭蕉に関する本を随分と読みその足跡をいろいろと調べたことがあった。その時ふと、父の〝お話〟を思い出し、あの「名月や・・・・・・・・」の句を捜してみたのだが、芭蕉の句の中にはどこにもそのようなものは見当たらなかった。真相を聞きそびれてしまった今は、これは、面白半分に語った父の創作であったのだろうと思っている。

暇さえあれば、読書していた父は時々、私の部屋にすっと、入ってきて、本を、ぽんと置いて「これ、面白いよ」と言って出て行くことがよくあった。父の口癖は人間生涯学生、「わしは今、社会大学五十何年生」「六十何年生」ということであった。

昭和四十八年三月一日、身体が弱って入院していた父を、私は見舞いに行った。

「今日は早いね、どうしたの」「今日は卒業式だったので早く終わりました」「ああ、卒業式ね、ところで、わしの卒業式はいつだろうね」それから十二日後に、父は静かに息を引きとった。その日が社会大学八十六年生の父の卒業式当日となった。

平成十一年 神奈川県高等学校通信制校長会 〝有朋〟 掲載

# ある不倫

鎌倉瑞泉寺の裏山に相模湾が一望できる東屋がある。私は若い頃、春の彼岸の中日、夕方いつもここにくることにしていた。この日、富士山の真上に夕日が降りる、それを見る為である。落日が頂上に近ずくと、白い富士の山肌が茜色に染まり日が頂上にかかるや、その動きが肉眼で見分けられる程の速さで沈んでゆく、沈み終わるとシルエットになった富士山の裏側が黄金色に輝く、この息を呑むような数分間の自然美を毎年この東屋で一人満喫していたのである。

昭和三十三年、その年も私は東屋への石段を登っていた。と、頭上で話し声がする「誰か来ている」案の定、東屋には長身の老紳士と和服姿の初老の婦人がいて、二人して私に軽く会釈した。私にはその老紳士が写真で見知っていた大佛次郎さんであることはすぐ判った。「夕日の見物ですか、僕もここが好きで昔からよく来るんですよ」と、大佛さんが話しかけてこられた。大佛さんは判ったが、どうやら奥様ではないらしい老婦人は誰だか判らない、それにしても驚いた、何と奇麗な人だろう、顔立ちの美しさもさることながら、落ち着きのある澄んだ瞳、陶器のように艶やかな頬、首筋から肩にかけて、匂うような品の良い色香が漂っている、着物の着こなしも只事ではない、誰だろう。

大佛さんにすっと寄り添って立つ姿が、どうかすると前の景色の中にふわりと溶け込んで消えてしまいそうに思える儚さを私に感じさせるのは何故だろう。

別れ際に大佛さんが「色々お話しましたね、楽しかった。来年もできたらお会いしましょう」と言って下さったが、以後会うこともなく、昭和四十八年に他界されてしまった。

平成七年、知人の一周忌にその墓参りで鎌倉の寿福寺を訪れた。この寺には、北条政子、高浜虚子、野尻泡影などの墓と共に大佛さんの墓もある。ふと、大佛さんの墓にいくつかの真新しい塔婆が立っているのを見て、大佛さんが亡くなってからの歳月を数えた。今年が「そうか、二十三回忌か」と気付いた。墓に近づいて、その塔婆の中に武原はんという字を見つけて私は思わず「あー」と思った。例の東屋でのあと、何げなく見ていたテレビの中で舞っている人があの初老の婦人であり地唄舞の武原はんさんであることを知ったのであった。

お二人の関係が色々取り沙汰された時があったという話を私が耳にしたのは大佛さんが亡くなって十年以上経ってからであった。その時はあ、やはりそうだったのかと思っただけであった。

あれからもう四十年近い歳月が流れている。今、この真新しい塔婆に書かれている武原はんという文字を見ていると、ひたすらな変わらぬ深い思いが痛い程伝わってくる。これは不倫ではない、もはや純倫（？）といった方が良いのではないかと私は思った。

大佛さんの生誕百年の記念行事が大佛さんゆかりの各地で行われている今年、武原はんさんも二月五日に九十五歳の生涯を終えた。その新聞報道に添えられた地唄「雪」を舞うはんさんの美しい写真を眺めながら、私は、遠い昔になった東屋でのお二人の姿に思いを馳せ、時の流れをしみじみと感じていたのであった。

平成九年記（友朋会）

平成十年神奈川県立高等学校退職校長会
"有朋"
掲載